

「お千代さん、一人かネ？」

「まア、若旦那！」

不意に驚いたらしいお千代は、周章て、手紙を巻きをさめ、硯箱と一所に隅の方へ押しやつて、

「何か御用ですか？」

「先刻は有難う。これはお前さんちやア無かつたけが。確かに此所へ返したよ。」

と、大造は針箱を其所に置き、同時に座を占めるのである。

「さうでしたか、……ちやア御自分でお縫ひなすつたの！私に一寸さう仰有つて下ださりやア、直さ縫つてあげましたのに……」

「さう思つたけどもネ、お前も忙しいのにそれちやア氣の毒だからねエ。」

「アア、何ですネエ、そんな御遠慮なんぞ爲すつて、私やア自分で出来ます事なら、どんなお手傳でも致しますよ。……かう申しちやアをかしい様ですが、貴方がこんな所へ入らして、さぞ御不自由だらうと思やア、お茂代さんだつて氣が氣ぢやありませんまい。それにまた、私がかうして此方に居ながら、お襯衣の綻び、一ツ縫つてあげず、知らん顔で居たと思はれちやア、私もほんとに、後にお茂代さんにお目に掛つた時、申譯が無いぢやありませんか。」

と、愛想よく云ふ顔を、大造はぢつと見て居たが、我知らず膝を進ませて、

「お千代さん！よく云つておくれたツたネ。僕は久し振で會つたお前が、それ程までに思つてくれると思ふと、私やアほんとに嬉しいよ。」

「ホ、それは貴君例と違つて、一方はこれからお國の爲めに、戦争にお出に成るんぢやありませんか。そんなら私達の様なものでも、出来る丈お世話をするのが、當然ぢやアありませんか。」

「ウン、難有い。……ちやアその志に甘へて、實は乃公も、ほんとに氣の毒だが、ちつとお前に頼み度い事があるんだ。」

と、やゝ云ひ悪さう、耳の後など掻いて見せると、お千代は無造作に、

「何ですネ、そんなに改まつて仰有らないツたつて、出来る事なら屹度致しますよ。」

と、飽くまでも頼もしい言葉。

大造は安堵の色を見せたが、また少し聲を低めて、

「時に他の女中衆は？」

「今お風呂を戴いでます。」

てくんないか、都合で三圓でもいゝんだが、…明日に成りやア乾度返すんだ。…どうだらう、出来まいか知ら？」

と、云ひ漣る口ながら、曇みかけて頼むのも、實は對手のお千代が急に返事をせぬ故である。暫時無言で居たお千代は、やがて徐ろに點頭いて、

「はア…お入用ならお貸し申しませう。ですが若旦那、そりやア何にお使ひなさるんです？」
「何にッて…實はその…乃公ばかりが使ふんでも無いが…」

と、又しても手は頭を掻く。

「そんなら皆さんで何うなさるんです？」

「野暮に聞くなア…明日アもう立つ體だから、今夜一杯やりに行かうと云ふんだナ。」

と、思ひ切つて云ひ放すと、お千代はわざと軽くうけて、

「大方そんな事だと思ひましょ。」

(四)

「何うだイ…聴かれないかエ？」

と、大造の心元無げに覗き込む時、お千代はそつと太息を吐きながら、

「いゝえ、他の時と違ひますから、まア仕方が有りません、御用達致しませう。」

「そいつは豪儀だ。それでこそお千代大明神様だ。」

と、急に元氣付いて、わざと手を合はせて見せるのを、お千代は尻目にかげながら、

「煽動たつて存じませんよ。」

と、押入の唐紙に手をかけたのは中から手箱でも出す氣であらう。

それを見るとまた大造は、

「ちよいと〜お千代さん！」

「何です…まだ他に御用ですか？」

「ウン…實は序にもう一つ依頼があるんだ。」

「どんなお依頼です！」

「他でも無いが、お千代さん！衣服を一枚貸してくんないか、」

「何ですッて？私の衣服を？」

「イヤ、お前の衣服に限つた事は無いが、實は男物だと猶いゝんだけども、どうもそれは至難からうから、女物で我慢するんだネ、それも平常着でいゝんだから、ちよつくら貸して貰ひたいなア。」

「をかした事を仰有いますねエ。で、それは何を爲さるんです？」

「實はその……今夜は久し振だから、一番新宿へ繰り込まうと云ふのさ。所がお前、此頃は憲兵がやかましいから、うつかり軍服で出かけた日にやア、直ぐ捕つて軍法會議に廻はされるんだ。そんな目に遭つちやたまらないから、それでお前に、一寸衣服を借りやうと云ふんだ。なアに、夜だも解るもんか、只軍服でさへ無けりやアいゝんだから、後生だ、ちよつと貸てくれな！」

と、さりとは隣を得て蜀を望む、蟲の好い依頼である。

それと聞くとお千代は、折角明かけた押入を閉めて、やをら膝を擦ち向けたが、見れば其眼中には穩かならぬ色を見せて居る。

「若旦那！」

と呼ぶ聲までやゝ改ためたが、猶對手を睨む様に見て、

「まだ貴君はそんな氣で居らつしやるんですか。まア、ほんとに今は全體何う云ふ時節だと思つてらつしやるんです？」

「さう云はれると一言も無いが、お前だつて、ちつたア察してくれなつていゝぢや無いか。もう明日は此所を立つて、戦争に出なけりや成らない體だせ。」

「それはようく存じとりますとも……ですから私は驚くんです。」

「何をだ？」

「貴君のあんまりなお心掛に、私ヤ何とも申されなく成つてしまひました。」

「申されなけりやア文句は入らないから、はやくその衣服を出しとくれな！」

「い、を否で御座います。」

「否なら仕方が無い金だけでもいゝ。」

「お金もつう貸されません。」

「ナニ、金も否だ。」

「はい。……そんな事にお使ひに成るんなら、私は一錢でも否で御座います。」

「なアんだ……あんな、立派な口を利きながら……」

「立派な口は利きますとも。」

「それぢやア乃公の爲めを思ふのア嘘かイ？」

「眞實です。眞實に貴君のお爲めを思へばこそ、私は否だと申すんです。他の御用なら知らない事、そんな事でお金や衣服を、私は何と仰有つても、決してお貸し申しやしません。」

「オイ、そんな意地の悪い事云はないで、たつた一ト晩だ、貸したつていんぢや無いか!」
「いんえ、一ト晩でも一時間でも、そんな事なら決して貸しません。第一考へて御覽なさい! 貴君は今も仰有る通り、是から戦争にお出に成るお體ぢやありませんか。そしてその戦争と云ふのは、天子様のお爲め、お國の爲めです。して見ると貴君のお體は、もう貴君の有ぢや無く、云はゞ天子様の有、お國の有ですよ。して見れば大切なお體、風邪も滅多には引かれない筈です。それを貴君は、何の事ですか? 御規則をぬけて、新宿なんぞに遊びに行つて、若しやその爲めに、悪い病氣でもお受けなすつて、折角戦争にお出に成つても、思ふ様に働けなかつたら、ほんとに何う爲さる御丁簡ですか? 私はまだ、常ならば知らない事、この場合に成つて、まだそんな氣をお起しに成る、貴君の御心がほんとに解りません。若しまた此事を、お茂代さんでもお聞きなすつたら、まアどんなにお腹立でせう。私にはほんとに、お茂代さんに對しても、決してそのお依頼は聽かれませんが、何卒悪く思つて下さいませうな!」

「さ、これを御覽下さい! 今申上げた御異見も、私が云つたとお思ひなされば、さぞお腹も立ちませう。然し今のは私よりも、このお手紙が仰有つたんです。どうぞ御覽下だすつて!」
と、云ふに初めて大造は、組んだ居た手を解いて、その手紙を受取るや否、
「ヤ、こりや お茂代の……あ、一言も無い。お千代さん! この通り!」
と、矢庭に疊に摺りつけた額を、漸くにして上げた頃は、その兩眼に一杯の涙! — 慚愧も男を泣かすものである。

四 號 外 賣

(一)

牛込は矢來の三番地、酒井家の邸内に、これはまた此区内切つての美人と、何時やら令嬢にも出た、退職判事喜多虎造の愛嬢、酉子今年十七と云ふのがあつた。

その健康がちと優れぬので、高等女學校は卒業前に退いたが、活花と琴とは、母なる人の嗜好にもあつて、隔日に師匠の許に通ひ、已に何れも免許まで取らうと云ふ所。

今日も琴の稽古からの歸途、其師匠は傳通院前に住んで居るのを、運動の爲めとあつて、天氣の好日は車にも乗らず、女中を一人供に連れて、それに稽古本を持たせ自分は空手にシヨールの縁を弄びながら、今しも寺町を矢來へと曲つて、我家の方へ向つて來た。

「ねエお嬢様！ 先程の號外は何で御座いましたらう？、また日本が勝つたんで御座いませうか知らう？」と、女中の話しかけるのを、酉子は一足先に歩きながら、別に振り向きもせず。

「さうだらうよ。何でももう今時分は、陸の方の戦のある筈だから、大方その號外だらうよ。」

「海軍での通り勝つたんで御座いますから陸軍でも負けや致しますまいねエ。」

「それは知れた事さ。」

「ほんとに嬉しう御座りますねエ。それでこそ私共までが、髮結さんにやるお錢を儉約して、區役所へ出しました甲斐が御座います。」

「だがねエ、清や、何故日本が勝つのだかその譯を知つて居るかエ？」

「何故ツて仰有いまして……それは御嬢様！ 日本が強いからで御座いますわネ。」

「それは元より日本は強いのだが、その強いのは、誰が強いのだらう……」

「それはあの……兵隊さんが強いので御座いませう？」

「兵隊は元より強いのだ。けどもその兵隊さんの強いのは、何故だらう？」

「それは、……それは強いから強いので御座います。」

「ホ、ホ、それぢやア譯が解らないねエ。」

「それぢやア何故で御座いませう？」

「それはねエ、兵隊ばかりぢやア無い、お前達が強いかからだよ。」

「ア、……私共は戦にやア參られませんよ。」

「それは元より戦にやア出られないさ。けれども、さうしてお前達までが、髪結鏡を儉約してまで、恤兵部へ献納しやうと云ふその心掛があればこそ兵隊までが強く成んだよ。それが若し兵隊ばかり命掛に働いて、私達の様な女の者は平気で、髪や衣服を飾つて氣樂な事はかり考へて居たら、兵隊だつて張合が抜けて、事に依つたら遂には、露西亞に負けるかも知れやしないよ。」

「まア、さうで御座いますかねエ。それぢやア私共も一生懸命に成つて、兵隊さんの加勢を致しませうよ。」

「さうお仕とも！ 女は戦に出られない代りに、お國に居てそれぐに、軍人の氣を勵ますのが、かう云ふ時の役目だよ。」

と、云ひ聞かして行く中に、はや我家近く厚い杉の生垣に深ふて、郵便函のある角を折れようとする途端に、けたましい人聲がして、誰やら其所に挑み合ふ氣勢。

流石女氣の少し透巡つたが、また好奇の心も出て、やがて其所を曲つて見ると、これはしたたり、印半纏に半股引、向鉢巻の逞ましげな男が、これは又久留米飛白の布子の裾を高く塞ぎ、下から綿ネルのズボン下を見せ、頭に古びに烏打帽を冠つた書生體の若い男を捕へて、頻りに鐵拳を振りまはして居ると、傍には新聞の號外が、半ば踏みにつられながら、道も狭しと散らばつて居る。

「アラまア可哀さうに、兩方共同じ商賣しながら、何だつてまア喧嘩をするんだらう。」

と、酉子は眉を顰めながら、郵便函の此方に立止まると、喧嘩も此所に見る人の出來て、更に景氣付いた様に、印半纏は圖に乗つて、鐵拳の運動を劇しくしながら、

「この野郎何うするか見やがれ！」と、抵抗もせぬ對手の面部を、またしたゝか打ち据えたが、その打ち所が悪かつたか書生體の男の鼻からは、忽ち赤い物が流れ出た。

「アラまア酷い！」と、女中迄が顔を反方向に、酉子も今は見るに見兼ねて我知らず進みより、

「まアあんまり酷いやないか、もう好い加減にお止めなさい！」と、優しい中にも凜とした調子で、その間へ割つて入り、まづその雪の様な手を、印半纏の肩へかけた。手をかけられた印半纏は、

「何イ？うちちやつてお置きなさい。この野郎が全體太エんで……」

「それはさうかも知れないけども、そんな酷い事しないでつていゝぢやありませんか。」

と、纖弱き手に押し隔てやうとする。印半纏は漸く對手を放したが、まだ腕を振りあげて居る。

「ア、御嬢様！お淨雲御座いますッ、御怪我遊ばすと、大變で御座いますよ。」

と、それをまた止めて來るのを、酉子は願で指圖して、

「いゝからお前は、其方の人の怪我を見ておあげ……アレ、血が……お前手拭でも持つて居るだらう。」

「ハイ……たしか御座いました。」

と、袂から出した手拭を、書生體の男に渡さうとして、初めて氣の付いた様に、

「アラ貴君は……志田さんちや御座いませんか？まア如何なすつたんですねエ。」

と、さも懇意らしい口振。

これを聞く印半纏は、俄に當初の元氣を收めて只口の中に罵りながら、其邊に落ち散つて居る外を、手速く拾ひ集めたと思ふと、

「醜態ア見やがれ！頼知奇奴！」

と、惡體一つを置土産に、その儘横町へ飛んで行つてしまつた。

其間に酉子は、落ちて居る烏打帽子を取りあげて、書生體の男に近よりながら、その血を手傳つて拭つて居る女中に、

「お前この人知つてるのかエ？」

「はア存じて居りますとも……御嬢様も御存じの筈で御座いますもの、この方はあの戸塚先生の所

に居らつしやる志田さんなので御座います。」

「アラ志田さん……まアほんとに……何うしてまた今の様な事を？」

「全體何う遊ばしたので御座います。」

と、左右から聞き寄るのを、志田と呼ばれた男は、直ぐにも答へ度いのであらうが、何分鼻血が止まり兼ねるので、手拭をそれに當てたまふ、只極まり悪げに俯視してしまふ。

「アレ、下をお向きなすつては、猶惡う御座いますよ。お待ち遊ばせ！」

と、云ふ中に帯の間から、手速く懐紙を出して、好い程にそれを圓め、

「さ、これを挿してお置き遊ばせ。さうすると直ぐに止まりませう。だが此所ぢや何だから、いつそ家までお連申した方が……」

と、見かへればお清は點頭いて、

「それが宜しう御座いますよ。……ね、志田さん……さうなさいました！それに御衣服もだい無しに成つとりますから、お邸で好い様に致しまう。」

と、何くれと介抱しながら、まだ恐縮して居る志田を、酉子とお清は左右から介抱しながら、程近い喜多家の門の方へ急いだ。

折から通り合はせた肴屋の丁稚は、空の岡持を肩に引かけながら、怪訝な顔に見送つて、
「なアんだ、笑はかしやアがらア」

(二)

酉子の案内に連れて半ばは嬉しく、半ばは迷惑さうな志田は、やがて喜多家の門を入ると、酉子はお清に指圖してわざと玄關からは上らず、その儘庭口を、やがて自分の居間へと導き、その縁側に席を設けた。

これは、志田の足の草鞋穿である爲めだが志田はそれさへも遠慮して、履脱石の此方に立ちすくみながら、初て丁寧に一禮し、

「どうもこれは、非常な御厄介に成りました。然し何卒お關ひ下さいませな！」

「イ、エ、御遠慮下さつちや困りますよ、今日は父も母も居りませんから……ですがまア、兎に角お顔やお手をお洗ひなすツて！」

と、云ふ時にはもうお清に運ばれて、湯の入つた金盥は、石鹼函に手拭まで添られて、はや縁端の置れてあつた。

「それでは失禮ですが……拜借します。」

と、志田はそれを受け取つて、傍の鉢前まで持つて行き、そこで顔や手を清めると、それをまた酉子は、縁の上から痛はし氣に見ながら、

「ほんとに、お衣服もひどく成つて居りますが、何かとお着更へなすつちや如何です、その中に縫はせますから……」

「何う致しまして、これはもう澤山で御座います。」

と、固く辭退して、これは頼まうともしなかつた。此時はもう鼻血も止まつたらしく顔の色さへ光澤を見せて來た。

「どうもいろいろ難有う御座いました。」

と、手拭を元の様に疊んで、金盥と共に縁端まで返へし、そのまゝ衣紋を直して、暇を告げやうとする様子に、酉子は、また志田に向ひ、

「まアほんとに、大したお怪我も無くて宜しう御座いましたねエ。ですが貴君！全體あれは何うなすつたのです！何でも敵手は號外賣の様でしたが、貴君まで草鞋なんぞ召して、その御風體は？」

と、尋ねかけると、志田は暫時逡巡つた後、

「實は私も號外賣なので……」

と、僅かに苦笑を見せた。

「まア、貴君も……」

と、此方はますます意外の體で、

「何うしてまた貴君までが號外なんぞお賣りなさいますの？」

「ほんとに好奇な志田さんです事！」

と、お清までが口を出すのに、志田は頭を掻きながら、

「イヤ、決して好奇ぢや御座いませんので……實はその……これも御奉公の爲めと思つて、此間から始めて見たのです。」

「御奉公ツて……それぢやアあの戸塚先生が、そんな事をお云ひつけ遊ばすんですか？」

と、又しても目を圓くするお清に、志田は何の答も與へず、少し足を進めて、

「お嬢さん！私は實に残念なので御座います。……ナニ、あんな奴に撲られるのは何でも無い事で

御座いますが、それよりも實に残念なのは、今日男子と生れながら、男子一人前の御奉公が出来ん

のです。」

と、果は聲も震えて聞えた。

この聲に打たれた酉子は、ちつと志田を凝視つて、其際の進むのを感じるのである。

志田は更に語を次いで、

「實は私に兄が御座りまして、それは國で百姓して居りましたから、私より身體も丈夫で、先年の

検査に合格しまして、その後豫備に成つとりましたけれども、先日の勅員令で、もう召集に應じた

ので御座います、それに私は、なまじ書なんぞ習ひ初めましたので、すつかり身體を懦弱にして、

昨年検査に出ましたけれども、眼の悪い爲めに丁種不合格、兵役を免せられてしまつたのです。で

すから今度の様な場合にも、軍夫にすら出る事が出来ず、さうかと云つて私の様な貧賤生、他人の

食客に成つて居る様な者が、軍資を獻金する事も出来ませす……如何にも残念でたまりません。こ

ら、遂に號外を賣らうと決心しました。それも決して好奇や、また利益の爲めではありません。こ

れで得た金を貯金して、せめて恤兵部へ獻じやうと思つたのです、所が……」

云ひかけて何故か行きつまつた。

此時酉子は、無言でお清を見かへると、これも無言で點頭いては、鼻から感嘆を洩らして居る。

(三)

志田は稍あつて、自から嘲る様な調子に。

「しかし……馴れん事は仕様の無いもので、……今日漸く先生の御心配で、新聞社から分けて貰ひまして、初めて賣りに出て見たんです。所が……何分馴れんものですから、どうもその「脱外々々」と云ふ聲が出ないです。」と、流石に我ながら笑ひかけたが、聴者の二人は真顔である。

「へエ……それは左様で御座いませうねエ。」

「で、仕方がありませんから、稽古して見たんです。」

「まア、御稽古を、何所で、」

「尾籠なお話ですが、……暫時辻の便所へ入りまして、獨りでやつて見たのです。」

「ホ、ホ、まア貴君！」

と、遂に噴き出したお清を、酉子は制して、

「何だねエ清は！ 黙つてお聞きな！」

「それから、やつと出来る様に成りましたから、思ひ切つて飛び出して見たんです。然し、どうも往來の賑かな所は、何だか氣が咎めて……甚だ意氣地の無い話ですが、どうも賣つて歩きにくひのです。それでまた考へまして、いつを閑な所がよからうと思ひまして、わざ／＼此邊まで參つて、二三軒賣つて見ますと、大分度胸も振つて來ましたから、この分なら行けるだらうと思つて、得意に成つて呼んで廻はつたのです。すると、突然先刻の男に出會ひまして、……彼の男は餘程馴れてると見えて、賣り方も私よりは上手でしたが、私を見ますと呼び止めまして、「お前は何時から仲間へ入つた」と聞きますから、「實は今日始めた許りだ」と、正直に答へますと、非常に立腹しまして、「この書生野郎奴！ 生意氣な事をして、乃公の縄張を荒らしやがる」と、亂暴にも私に撲つてかゝつたのです。」

「まア……」

と、此方の二人は顔見合はせた。

「その理由はよく解りませんが、兎に角彼の男の賣つて居る所へ、私のまた賣りに來たのが、悪いつたのだと思ひますから、私は決して抵抗をせずに謝罪つて居つたのです。けれども彼の男は承知しませんで、ますます亂暴を加へるので、私も大いに迷惑して居りました所へ、丁度貴女方がお出

で下だすつたので……お蔭で難局を免れました、まことに難有う御座いますが……然し、考へて見ますと、實に残念で御座います。」

「ほんとにねエ、さぞ御残念で御座いませうとも、あんな奴に酷い目にお會ひ遊ばして、私が若し男だつたら、直ぐに御加勢をして、彼奴を思ふさま撲つてやりますのにねエ……」

と、お清はその赤無色の様な腕を扼して、頻りに同情を表して居る。

志田はそれに頭を振つて、

「イエ……私の申すのは、それが残念なのではありません。——折角思ひ立た事まで、また意外の妨害の爲めに、果たす事が出来んかと思ひますと、實に残念で御座います。」

と、云ひ了つてちつと唇を噛んだのは、先刻打たれた頭部や面部の、疼痛を耐へる爲めとも思へない。

此時まで言葉も無く、只感に堪へかねてのみ居た酉子は、初めてその口を開いて、

「まアほんとうに志田さん！よくそれまで決心を爲さいましたねエ。成る程號外を買つて、その利益を恤兵部へお出しなさうとは、ほんとに好いお考案ですワ。この頃は號外流行で、毎日それを賣つて歩く者が、何千人あるか知れませんが、それはみんなこの機会に、お金を儲けやうと云ふ者

ばかり、貴君の様な感心な方は、他に幾人あるでせう。ねエ、清や……さうぢや無いか。」

「ほんとにねエ、私はもう先刻から、涙がこぼれました位で御座います。それにあの號外賣の畜生——ほんとに憎らしい奴で御座いますねエ。」

「それはほんとに憎らしいよ。だけれども志田さん！なんぼあの號外賣が、貴君の爲さるのを邪魔したからと云て、そればかりで折角お初めなすつた事を、また止めにならなけりやア成らないと思ひなさるのには、——それは貴君！男の方にもお似合ひなさいませんのねエ。」

と、最後の言葉に力を籠めて、少しは窘める様に云つた。志田は我知らず眼を見はつてちつと酉子の顔を見つめたのである。

折から主人の歸宅と見へて、門に入る車の音高く、甲走つた車夫の聲に、

「お歸りイ！」

(四)

「オヤ、お歸りで御座いますよ。」

と、お清はまづ急いで玄關の方へ行つた。志田も長居を憚つてか、

「それでは私は御暇致しませう。」

と、急いで一禮するに、酉子も今は強ひても止めなかつたが、

「お歸りですか……では志田さん！今日は何うなさいますの？」

「今日はもう仕方がありませんが……明日にもまた號外が出ますれば……」

「矢張り續けて為さいますか？」

「はい！致します。」

酉子の念を入れた言葉には、志田も固い決心を示して、そのまゝ辭儀をしたと思ふとはや庭口を出たのである。

後を暫時見送つた酉子は、まだ何やら云ひ度げであつたが、やがて獨り點頭いて、縁傳ひに居間の方へ来ると、母は今歸つて来たと云ふ體で、火鉢の側に一寸住ひ、その傍には辰子と云つて、今年十二に成つた姪のまだ座にも着かなかつたが、酉子を見ると走りよつて、

「姉様！——私今日好いのを買つて頂いてよ。」

と、甘へる様に取り付いた。實は叔母様と云ふべきであるが、その兩親の亡つてから全く此家の世

話を受けて居るので、今は姉妹の體に成つて居る。

酉子はいとしげにその頭を撫でながら、

「さう、何を買つて頂いたの？」

「アノ十軒店へ行つてネ、いゝ五人囃を……私お雛様は持つてるけども、まだ五人囃が無かつたか

ら……」

「まア、さうかい？」

と、云つたが別に喜んでやらす、やがて母に向つて、

「阿母様！事實なので御座いますか？」

「あんまり此娘が欲しがらから、一寸十軒店へ廻つて、好さうなのを見て来たよ。けれども着附が少し氣に入らないから、急いで更へさせる様にしたのさ。」

「さうですが……。ほんとに此人は解らないから仕方が無いねエ。」

と、何やら嘆息して居る様子、

母は少し辯解顔に、

「それでも何うせ要る物だから。」

と、云ひかけるのを遮つて、

『それはそうかも知れませんが、時節が時節ですから、……私はまた今年なんぞは、お雛様を飾るのもいゝけれども、例の様な御馳走をしたり、お客を呼んだりする事は仕ない方が好いと思つた位です。女中達にまでさう云つて、成る丈無駄な事を省いて、それを恤兵部へ寄附させる様にしておきながら、上の者が先に立つて、無くて済む物まで買つて、餘計なお金を使ふのは、私あんまり感心しないと思ひます。……それに私、大層感じた事がありますの。』

と、母の近くへ席を占めながら、

『あの、阿母様は御存じありますまいが、あの戸塚先生の所のお弟子で、よく自家へも御使に來る志田と云ふ人があるんですよ。この人がネ阿母様！自分で號外を買つてあるいて、そのお金を溜めてから、區役所へ持つて行く心算なんですとさア、』

と、是から今日の出來事を、一通り話して聞かせ、

『それが仲間にも邪魔されたものですから、もうやる事が出來ないかと云つて、大層残念がつて居ましたから、私はそんな事はありません。そんな邪魔があつたと云つて決して止めるには及びますまいと、さう云つてあげたら、それでは矢張り買ひませうと云つて、たつた今出て行つた所なので

す、で、私はあんまり感心ですから、是からは自家を初め、私のお友達や、また御近所の方にも願つて、他の號外賣のは買はず、あの人の許り買ふ様にします。』

『まア、さうかい、ほんとに感心な人だねエ。』

『ですから私は思ひます。そんな感心な人さへあるのに、なんぼ辰ちやんが年がゆかないつて、無くて済む五人囃なんぞを無理にねだつて買つて頂くなんて……』

と、云ひさして尻目に見た、その目は何と光つたか、辰子は酉子の膝へ手をかけて、

『姉さま……堪忍して下さいさいよ！』と、媚びる様に見える顔には十分悔悟の色あつて、寧ろいぢらしくも見えたから、酉子は聲を和けて、

『なにも謝罪の事は無いけども、ねエ、辰ちやん！その理が解つたら、もう今度からお氣をお付けなさいよ。』

『はア、ですから私もう要らない事よ。』

『でももう買つてしまつたら、そんな事云つても仕方が無いけども……』

『いゝえ、まだ買つて來やアしないの。ねエ、祖母様！電話で断れば間に合ふわねエ。』

と、云ふ中にもう其所を立つたが、やがて納戸の方に當つて、鈴の音チリ、ン、ン！

五 海戰遊戯

(一)

「辰二やーコレ辰二やー御膳だよ！はやくお入来！」
と、母は障紙越しに呼んで居る。今し方までその縁側に、近所の友達と遊んで居た筈の辰二は、更に返事をしない。

母は訝りながらも、膳立の手を放し兼ねて、まだ明けても見なかつたが、その中にお茶が列んで箸を取る計りにしても、まだ辰二は歸つて来ない。

總領の丑夫は此間兵學校を卒業して、少尉候補生になると間もなく、某戦團艦に乗組んで、此間の旅順の海戦に天晴れ初陣の奇功を奏して、新聞にもその名を歌はれ、已に某の雜誌社から、わざわざ寫眞を借りに來た位。母の身の嬉しさは何れ程であらう。

されば弟の辰二も、あはれ此見にも負ぬまで仕込んで、何れはこれも軍人にと、夫が眼の黒い時からの目算、萬一この桁が合はいでは、位牌への辯解立たすと、お甲流石は武家育の、心の弓に弛みは無い。

然るにこの辰二は、此年十三に成つて、體こそ普通を外づれて大きけれ、氣はあまり強からず、その上人が好過ぎるので、年下の者にさへ、時には馬鹿にされ兼ねぬ代物。最負眼にも母は齒痒く時には機を断たぬ斗りに、随分厳しく叱るのであるが、それさへ暮に礫であつた。

今日は土曜日、午後の休暇を、辰二は友達を連れ込んで仲好く遊んで居た様子であつたが、今夕餉の間際に成つて、何所へ行つたか姿を見せぬに、

「また黙つて出て行つてしまつて、ほんとに困る子だねエ！」

と、吐きながら庭傳ひに、同じ長屋の左右を覗て見たが、何處もそれらしい影は無い。

斯うした事は子供の習ひで、今に初まつた事では無いが、何としても此日計りは、棄てても置かれぬ心地がして、お甲は襷を半ば外づしながら、其儘表の方へ出て來た。

表と云ふても此邊は、郡部に近い片側町前は某學校の敷地と計り、周圍に土手はありながら、中は、まだ空地なので、その片隅にある杉の森へ、時求める鴉のはかには、人通りさへも無いのであ

る。
生垣の外に暫時立つて、彼方此方を見渡して居たが、まだ歸つて来る様子も無いので、お甲は肩を擧めながら、また家へ入らうとする時、

「叔母さん！叔母さん！松崎さん所の叔母さん！」

と、右手の四角から聲をかけて、忙しさうに走り来る者がある。

振りかへれば辰二の友達で同じ年の藤吉と云つて、近所の植木屋の倅であるから、

「藤ちゃん！何だエ？」

と、また二歩ばかり出て来ると、藤吉はそこへ喘ぎ〜来て、

「今辰ちやんがネ……あの大變ですよ。」

と、眼を圓くする様子が、只事とも思はれぬので、お甲も少し胸を躍らせながら、

「大變て？辰二が何うかしましたかエ？」

「アノ……アノ……辰ちやんがネ、今一同にいちめられて、彼方の原で泣いてますよ。」

と、杉の森の方を指した。

「まア……、それちやア辰二はお友達と、そんな所まで出かけて行つたんですか。先刻まで自家に

居ましたのに、何所へ行つちまつたかと思つて、私やア心配してたんですよ。それちやア呼んで来てやりませう。」

「僕が教へてあげませう。」

と、藤吉は殊勝らしく、先に立つて案内した。

「さう……まア有難うよ。……だが、何だつてまたそんな所で、辰二は皆さんにいちめられてるんでせう。」

「ナニネ、先刻から一同で、戦争事して遊んでたんです。戦争事して、例の戦ぢやアつまらな
いから、今日は學校で先生に教つた、海戦遊ツてエのをしたんです。……海戦遊ツてエなアね。叔
母さんほんとに面白いんですよ。みんな人間が軍艦に成つて、戦艦だの、巡洋艦だの、驅逐艦だ
の、水雷艇だのッて、初めにちやんと極めとくんです。それでもつてネ、日本と露西亞と兩方から
出て来て、中央でもつてぶつかつて、戦争事するんです。その時大勢で一人にかかたり、一人で
大勢に向つたり、いろんな法があるんです。それでもつて辰ちやんは、艦が大きいもんだから、露
西亞の方に成つて一等戦艦に成たんですけれども、角力を取ると弱いもんだから、直ぐ水雷艇に
負けちまつて……置き出して逃げやうとすると、一同が尙の事面白がつて、さア今度ア、水雷艇も

「軍艦も、巡洋艦も、戦艦も、一時にかンッて、たつた一人を酷い目に會はしてゐるんです。それでもつて、僕ア止めたけれども聞かないから……だから叔母さん呼びに来たんです。」と、話しながら来る中に、四角を曲つて半町計り、其所の土手の切れ目を入ると、はや彼方に閑の聲が聞えた。

(二)

廣々とした草原の、それも冬枯のまゝの片隅には、半ば焦色に成つた杉の一叢、それに沿うて小高い築山さへ見える。

藤吉はその方を指して、

「ア、あの山が旅順口の砲臺で、日本の軍艦は此方から向つたんです。ソラ、あの杉の森の中に大勢が居る、あれがみんな日本の軍艦ですよ……、オヤ辰ちゃんは何うしたらう。」

と、云ひつゝ進んで行く中には、人の顔も定かに見えない様に成つた。

途端に、所謂軍艦の方でも此方の二人を見付けたと見えて、互ひに何やら信號するよと見れば、こは如何に、さしもの日本艦隊の、杉の森深く、背進して忽ち何處へか痕を晦ました。

が只山の根に只一人、これは坐礁と云ふ氣味で、草の上に坐つたまゝ、シク／＼泣いて居るのである。

「ア、彼所に辰ちゃんか……他の人アひどいなア、叔母さんが来たらみんな逃げてしまつた。」と、藤吉の言葉の中に、お甲は、やわが子の側へ来たが、わざと嚴な聲をして、

「辰二？ お前そんな所で何をしてゐるんだ？」と、云つても辰二は頭もあげず、却つて咽喉を絞る様に、わざと高く泣き出した。

その聲に驚いて、藤吉は走りよつてその肩に手をかけ、

「辰ちゃん！ もう泣くなア止しまひ！ 阿母さんが来たから大丈夫だよ。」と、頻りに慰むべく勉めて、はては助け起さうとして居る。それをお甲はわざと制して、

「藤ちゃん！ うつちやつてお置きなさい！ この子はまア大きな體をして、何の事ですその態は？ 今この藤ちゃんに聞きやアお前はお友達と戦争事をして、負けたんだと云ふぢやア無いか。負けたなアお前が弱いからです。それを泣く人が何所にあるのだ？」と、果は鋭く叱りつけた。

頼む木蔭に雨の洩る想で、更に涙に沈む辰二より、意外に堪へぬは藤吉である。彼は全く辰二を救はうとして、一人の力に及ばぬ所から、折角その母を呼んで来たのである。さればその母こそは、敵なる腕白共を引捕へて、小氣味よく辰二の仇を返すか、左無くば辰二を抱きあげて、その傷を甜るのであらうと、それを途々も想ふて居た。然るにこれは思ひの外な、重荷に立ち得ぬ瘦馬に、猶鞭をかざす様な小言、他所事ながら腹に据えかねた。

「叔母さん！それは酷いぢやありませんか！何も辰ちゃんが悪いんぢやない……僕アちゃんと知つてます。他の友達が悪いんです。」

「それはさうでせう。弱い者いぢめをする様な者は、どうせ善い人ではありません。けれども高が遊事に、敗けた計りか、泣面までさらして、そんな意氣地の無い事がありますか。辰二やーさ、お前何時までも起きない子、泣くなら何時までも泣いてお居て！阿母さんはお前の泣いてる間、此所でちやんと見て居るよ。——どんな酷い目に會つたのか知らないが、見りやア何所にも怪我は無く手足だつてちやんとして居るぢやないか。それで立てないとは何うしたのだ。さ、お立ち、獨りでお立ちーエ、藤ちゃん！うつちやツツ置いて下さい！」

と、更に扶助を許さぬ母の面は飽くまで厳しく見えたが、——何事ぞその眼には、涙を一杯溜へて

居る。

(三)

母にかくまで勵まされて、今は流石に辰二も、痛さをこらへて立ち上つたが、尙頻りに泣きしやかつて居る。

見ればそのやつ口綻びて、腰から膝の邊は泥だらけだ。

母はその泥を拂つてやり、やがてその手を取つて引立てる様に歩を進めたが、まだ優しい言葉はかけない。

藤吉はまたその後から、心元なげに辰二を凝視ながら、これも黙つてついて行く。物の二町計りは三人とも無言で、その中に元の土手から出て、はや家近く成つて来た、其頃から辰二も、大分機嫌を直したと見えて、今まで動もすると眼を擦つた手も、ダラリと垂らしたまゝ、その鼻を吸る聲も聞えなく成つた。

それを見てやつと安堵したらしい藤吉は、チヨコく側へ走りよつて、

「辰ちゃん！酷い目にあつたねエ。ほんとに一同は亂暴だよ。弱い者がいぢめをするんだもの……。」
もう何所も痛かア無いかイ？」

と、親切に問ひかけると、辰二は軽く點頭しながら、

「……酷いやア……僕にばかり一同でかゝるんだもの……。」

と、まだ十分の怨恨を見せて居る。

母は此時漸く口を開いて、

「けれども藤ちゃんは、ほんとに、感心ですわね、他の者はみんな面白がつて、此兒ばかりいぢめの中に、お前さん一人この兒の肩をもつて、よく私に知らせておくれでしたわねエ。ですが藤ちゃん自家の辰がそんな目に會ふのは、みんな自分が悪いんですから、仕方がありませんよ。」

と、云ふ顔を訝しうに見あげて、

「なアに、辰ちゃんが悪いんぢやありませんよ。」

と、辯解を試みやうとしたが、それはお甲には容れられなかつた。

「いゝえ、辰二の弱いのが悪いのです、こんな大きな體をして居ながら、意氣地が無いんですもの……辰や！お前は兄さんを知つてお居るかエ？——兄さんは何をして居て、今何所に居るか知つて

お居るかえ？」

と、意味あり氣に問ひかけたが、辰二はまだ答へずに居るのを、藤吉は引取つて、

「あゝ、辰ちゃんの兄さんは羨いんです。海軍の軍人に成つて、今戦争に出てるんだつて、いつでも辰ちゃんが威張つてるんです。」

「さうですか……それぢやア辰二は、兄の事を威張つてるんですネ。」

「先刻も辰ちゃんは、僕の兄さんは海軍だつて、初やア大變威張つてたんだ。さうしたら一同がかゝつてツたんです。その時、辰ちゃんてば、かまはず向つてきやアいゝのに、恐がつて直ぐ逃げるものだから、みんな馬鹿にして、あんな酷い目に會はしたんです。」

「そ、それが辰二の悪いんです。——辰二！お前そんなに兄さんの事を威張るんなら何故兄さんに敗けない様に、強い働きをしないんだエ？」

と、云はれても只指を咬むばかり、辰二は又候泣き出しさうに成つた。

何時かはや我が家近く来て居る、只見れば其格子戸から、郵便脚夫が一人出て來た。

それと見てお甲は足を速め、藤吉に別を告げると間も無く、ツと走り入つて玄關へ上ると、恰も其處に居合はせた下女が今受取つた計りの開封を一冊、手ばやくその掩紙を破つて見れば中からは

日露戦争實記

(四)

「辰二や！一寸来て御覽！」

と、母に呼ばれて、火鉢の側へ来て見ると、母は洋燈の心を少し出して、今まで自分の見た居た日露戦争實記の口書を、ブツとわが子にさし付けたが、その肖像の一人をさして、

「それをお前知つてお居るかエ？」

と、云ふと、辰二はその聲に應じて、

「ヤア知つてるとも、兄さんだア。」

「そんなら此所にある字は？」

と、指で示したその上の四號活字、辰二は一寸首を傾けたが、

「旅順攻撃の勇士……」

「旅順攻撃の勇士……何の事だか解つてるかエ？」

「此間旅順口の海戦の時に、よく働いた人ッて云ふ事だせう。」

「ふう……よく解つたねエ。」

と、暫時辰二の顔を見て居ると、辰二はそれに氣も留めず、ちツと兄の肖像に目を注いで、

「ほんとに豪いなア……威勢がいくなア……」

と、頻りに感心して居る。

母はやがてニつと笑つて、

「だが辰ちゃん！お前は何時さう云ふ所へ出るの？」

「何時ッて……僕ア……まだ……子供だもの。」

「大きく成つたら出られるのかエ。」

「……出ますとも。」

「さう……出る事は出るだらうねエ。だが、お前の出る所はちがやしないか、お待ちよ。」

と、雑誌を取りあげて、その口書を二三頁めくつた所を、また辰二にさして見せた。其所には露西亞の軍艦の、港口に撃沈された所で、恥を曝らされて居るのである。

それを見ると辰二は、流石に顔を赤くして、ちつと俯視たまふ黙つてしまつた。

此時母は、眞顔に成つて居住を直し、その聲もしつとりとした調子に、
「辰二！お前も兄さんの弟ならば、矢張りその兄さんの様に、戦へ出たらば強い働をして、軍人の
手本と云はれて、かう云ふ所へ出る様に成らなかりやア、お亡りに成つた阿父様に申分がありませ
んよ。——それにお前は、軀ばかり大きくても、意氣地と云ふものが無いもんだから、いつでもお
友達に馬鹿にされる、今日も今日で、また一同にいぢめられたと云ふぢやないか。それでお前は偉
しいと思はないかエ。——お前よりはこの阿母さんが、どんなに忌々しいか知れやしない。」
と、云ひさして襦袢の袖を、一寸その眼にあてたが、更に咳拂一つして、

「さうかと云て、何も亂暴ばかりして、人をおいぢめと云ふのぢやア無い。それは他のお友達の様
に弱い者いぢめをするのは決して眞個の男とは云れないよ。——丁度今度の戦の、日本と露西亞を
よく御覽：日本はこんなに小さなお國だけでも、イザと云ふ時は、強い者に向つても、決して卑怯
な眞似はしやしない。それに引かへて露西亞と云ふ國は、あんなに大きな柄をして居て、平常威張
りくさつて、支那だの朝鮮だの捕へちやア、弱い者いぢめをして居るけれども、サア戦争と成ると
直ぐに日本に敗けてしまつたぢやないか。——ほんとに、それを思ふとお友達が、お前を露西亞の
軍艦にして遊んだのも、ほんとに無理は無無いと思ふよ。——だがお前は、やつぱり露西亞が好いの

かエ？」

と、云ひかけると、辰二は急いで頭を振つて、

「ウーン、ウーン、僕ア日本だ、日本だア！」

と、何時に無く活潑な聲！母は思はず微笑を洩らした。

折から表の格子が開いて、誰やら來客の様子である。

取次に出た下女は、玄關で何か口條を聞いて居たが、やがて居間へ入つて来て、

「アノ……只今此方が……」

と、前へ出した名刺を見ると『〇〇獎兵會委員、横田藤兵衛』とあつた。

物奇に覗き込んだ辰二は、

「やア……藤ちゃんの阿父さんだ！」

(五)

「まアお通し申しておくれ！」

と、云はれて下女の立つたと思ふと、やがて入つて来たのは、相双子の繪入の上に、秩父館仙を羽織つた、半禿の五十前後の男きごち無さうに其所に坐つて、

「へい御隠居様！夜分に出まして、まことに御邪魔を致します。」

と、丁寧に辭儀をするお甲もしとやかに禮を返へしながら、

「まア藤兵衛さん！大層今日は改まつて入らしたぢやありませんか……お前さんなら御取次にも及ばないのに……何だか四角張つて名刺なんぞ……」

と、云はれて男は頭を掻きながら、

「へ、何でですか、大したもんで御座いませう。……イエなに、冗談ぢや御座いません、他の事たアちがひますから全體袴でも穿いて来なくちや成らねえんですが、其奴アお馴染甲斐にまア御免蒙りまして、こんな風俗で上つたんでげす。實はその今晚上りましたなア、奨兵會の方から出ましたんでげして……」

と、云ふ時その懐中から、紫縮緬の服紗に包んだ物をうやくしく膝の側へ置いたが、

「此度はどうも丑夫さんにやア、巧くやつておくんせエました。お目出度エ事ツて御座エます。それに附きましちやア、兼々會の方にも内規が御座エますんで、今日やアその、お賀びに上つたん

で御座エやす。」

と云ひながら服紗を解くと、中から奉書包に水引をかけて、上に「勝男節」と書いたのが出た。

「まことに輕少で御座エますが、こりやア町内の者の微志で、何卒お納めを願ひ度いで……」

と、お甲の前へさし出して、後は服紗を疊んで居る。お甲は氣の毒さうに、

「まア、何ですか、そんな物戴いていゝんでせうか。」

「いゝ所ぢや御座エません。何しろお前さん、この町内からさう云ふ豪儀な人が出りやア、町内の鼻が高うがさア。まだ他に豫備や後備で、随分出てる奴アありますが、若旦那にやア敵やしませんほんとに巧くやつておくんすつた。私やアもう嬉しくつて、人せエ見ると若旦那の話をしてやるんでさア。今日もお前さん、朝からあの微發つて奴で、奥の座敷に輜重兵が七人来てますが、私は直ぐに捉がめエて、若旦那の話をしてやつたんでさア。さうしたらもうちやんと知つてましたぞ。何しろもう斯う成つちやア、松崎丑夫ツてエ名ア、日本中に知ねエ者は無エんだから有難エんだ。」

と、云ふ時側にあつた戦争實記に目を付け、

「何です此奴ア？」

「それはお前さん！今度の戦の事を書いた雑誌ですよ。丁度丑の顔も出てますから何卒見てやつて

下ださう。」

「ナニ若旦那のお顔がネ、もう出てますかイ。速ニもんだなア。」

と、急いで雑誌を取つて口蓋を檢め、その首を左右に振つて、頻りに感心の體であつたが、折から覗き込んで居る辰二に向ひ、

『どうです辰坊ちゃん！お前さんもやく斯う成らなくツちやいけませんせ。えッ、如何です、兄さんは豪儀ぢやありませんか。』

と、云ふ時母は引取つて、

『所がもう此の兄の方は、ほんとに意氣地がありませんので……』

と、又しても太息を吐くので、辰二はまた極り悪さうに、その首を縮めてしまった。

その夜藤兵衛の歸つた後で、お甲は義兵會からの贈物を、一寸戴いてから水引を外つし、中を念の爲め檢めて見ると、大方鯉節の切手と思つたのが、正身の五圓札が一枚！

『まア、こんな物なら受けるのでは無かつた。』

と、お甲は暫時途方に暮れて居たが、やがて何やら點頭くと、その儘神棚に供へて置いた。

越えて二日計り、人在つて〇〇區役所の前に、その軍資献金の揭示場を見ると、まだ新しい木札に筆太く、

『金五圓也』

松崎辰二

小波遊書

軍國女氣質

100K

明治四十三年九月
明治四十三年九月



日印刷
日發行

(小波遊書)

定價金貳圓



著者 巖谷小波

發行者 大橋新太郎

印刷者 水谷景長

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

博文館

本文庫は著者が最近文壇代表的傑作各廿數篇宛を收む

名家小説

第一編 ●露伴叢書

前編 後編

菊判總布特製函入
紙數九百八十六頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

前編

○二日物語 ○將基雄孝 ○客舎雜記 ○珍饈會 ○獅子座 ○折々草 ○毒米屋 ○夜の雪 ○將基雄話 ○地獄湯日記 ○元祿時代の雜劇 ○和合樂 ○ひげ男 ○俺傳 ○縁の縁 ○休暇傳 ○夢がたり ○川舟 ○新學士 ○迷霧 ○醉興記 ○まき筆日記 ○是は〜 ○大珍話 ○縁外縁 ○伊能忠敬

後編

○腕久物語 ○鐵三段 ○箱根草 ○新浦島 ○突貫紀行 ○うつつしる日記 ○文明の嵐 ○春の山 ○自編自傳 ○錢獵孝行 ○鄭成功 ○醉興記 ○遊行雜記 ○當世外道の面 ○蹄體 ○夢日記 ○日蓮上人 ○易心後語 ○旅の心得 ○封じ文 ○冷干水 ○ひとよ草 ○二宮尊徳 ○春の一日 ○知々夫紀行

第二編 ●澁柿叢書

菊判總布特製函入
紙數一千頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

內容

○釜煮 ○島勘左衛門 ○片桐且元 ○男の面 ○大風乾之助 ○密告 ○妻の心 ○是非もなき ○眞野武士 ○由井正雲 ○他流試合 ○此の戀 ○猿冠者 ○不老術 ○親の面 ○大石内藏之助 ○脱走兵 ○鐵火 ○新粧の法 ○五月人形 ○天野屋義平 ○振武軍 ○聚樂殿 ○夢と夢 ○三千石

第三編 ●柳浪叢書

前編 後編

菊判總布特製函入
前編紙數千四頁
後編紙數千四頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

説文庫

第六編 ●花袋叢書

菊判總布特製函入
紙數千三十四頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

前編 ○おしかげ橋 ○昇降場 ○骨のすみ ○妾 ○今月心中 ○隅田の夜路 ○翠の關 ○變傳目 ○節の夢 ○狂言 ○百鬼 ○畜生腹 ○重つま ○貯金玉 ○花ぐるひ ○幼時

第七編 ●水蔭叢書

菊判總布特製函入
紙數千餘頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

後編 ○非國民 ○名物松原殿頭 ○歐加留多 ○黒蟻 ○兄の煩悶 ○七騎法 ○紫襦布 ○二人やしろ ○女夫心中 ○八幡の狂女 ○親こゝろ ○そまる縁 ○座敷牢 ○中川心中 ○淺瀬の波

第八編 ●小波叢書

菊判總布特製函入
紙數千餘頁

正金 貳圓
小包料金 拾六錢

內容 ○女房殺し ○新潮來曲 ○旅役者 ○林間の高塔 ○湖心の雪 ○紫海苔 ○水樓記 ○別荘守 ○紙子くらべ ○つき紙子

●以下諸名家の叢書を逐次刊行す

本文庫は内美紙質の精裝釘の麗と相俟つ出版界に美色彩を添ふ

巖谷小波君著 (久保田米徳齋伯裝釘並書)
新洋行土産 全二冊中判新形
紙布金襴摺入
正價各金壹圓參拾錢 小包料各金八錢

先に伯林二年の觀察を洋行土産二巻に現
はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめし
著者は、此度渡米實業團に加つて在
米三月間の見聞を新洋行土産と
して發表す。著者が鋭利な
眼光と輕妙なる筆致
あり。世に定評
彼の實業團の
渡米や、亦本邦
空前の擧なりと
す。本書他の外
遊記に比して、其
光彩を異にせる
もの、素より論
を俟たざるべし。

巖谷小波君著
久保田米徳齋伯裝釘
伯林二年の觀察
上 〇〇 伯林二年の觀察
下 〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察

新洋行土産
全二冊中判新形
紙布金襴摺入
正價各金壹圓參拾錢
小包料各金八錢

巖谷小波君著
久保田米徳齋伯裝釘
伯林二年の觀察
上 〇〇 伯林二年の觀察
下 〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察

(行發館文博)

田山花袋君 前田木城君共編
評新古文範 全三冊中判上製
紙數五百三十頁
正價金七拾錢
小包料金八錢

東京日日新聞評
今のあらゆる面白き文章源平盛衰記太平記等の面白き
所などを採録して解釋よりは批評と解題とに
重きを置きて文學上の廣き智識を讀者の
に持たせんと苦心したる編者の
好意は多とすべく知名の
詩歌新聞類日記叙
景文等を卷末に載
せたるは始めて文章を
學ぶもの、好師範た
るべし本書の特色は
實に在來の文章解釋
の香と形式を異にし
るに在り

石橋 瓜案 君著
海濱 變遷 君著
本日は文學遊戯大全
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察
〇〇 伯林二年の觀察

文學遊戯大全 全一冊中判
紙數四百四十頁
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

東京帝國大學 佐々木信綱君著 (袖珍裝釘並書)
庫第一卷定家歌集
正價金卅五錢 郵稅金四錢

東京帝國大學 佐々木信綱君著 (袖珍裝釘並書)
庫第一卷定家歌集
正價金卅五錢 郵稅金四錢

續刊 第三卷 ●千蔭春海歌集

讀賣新聞記者 松川木公君著
樺太探檢記 洋裝中判厚裝紙美本
風俗寫真版摺入
正價金參拾八錢
郵稅金六錢

▲東京二六新聞評 著者は讀賣新聞記者本務は著者
が樺太の探檢記なり。探檢記と云ふよりし樺太に於る著者
の感想を記述したるものなり。事實の説明は他に之を譲つ
て一篇文士の眼に映じたる樺太を描きたるものなり
▲京都日出新聞評 曾て讀賣紙に掲載されたるもの
探檢記の外に樺太の物語ありて甚だ興味に富むる頭には數
葉の寫眞を收め趣味多き冊子たることを疑はず

(行發館文博)

農學博士新渡戸稻造君監修

前田長太君纂譯

●發行所 博文館●

西洋武士道

全一冊 洋裝菊判布上製四百五十七頁
挿入 寫眞版 廿三頁(附家傳)
正金壹圓廿錢(小包料)

報知新聞評

西歐の地に封建時代の花と諺はれたる義騎の眞相を紹介し泰西武士道固有の美點を述ぶ他山の石以て我玉を磨くべし精神修養の資たるべく又東西武士道比較の資たらん

讀賣新聞評

本書は西洋武士道の始源憲法少年青年各時代武士加入式結婚家展最期典型等を収録して西洋武士道を説きたるもの又以て興味ある書と云ふべし

時事新報評

レオンゴーチ氏著「L'education」を譯したるものにて部門を十章に分ち西洋武士の眞面目を描寫して彼の特質美點を本邦の武士道に副へんとするもの也

中央新聞評

レオンゴーチエムの原著ル、シヅワリエーを譯出せしもの泰西武士道全盛時代の事蹟を傳へて遺漏なし日本武士道の諸書と共に現代青年銷沈の意氣を治する好著と云ふべし

ナポレオン性格論

文學士 土井晚翠君著

全一冊 四六判洋裝上製 紙數三百十七頁 正價金五拾五錢 郵税金八錢

英國水ネルソン傳

海軍省教育本部 版

全一冊 菊判總布上製 紙數千三百二十頁 正價壹圓六拾錢 小包料金拾貳錢

偉人の母

前田越嶺君譯

全一冊 菊判洋裝美本 紙數百九十八頁 正價金參拾八錢 郵税金六錢

北越新報主筆 今泉鐸次郎君著

●發行所 博文館●

河井繼之助傳

全一冊 菊判總布特製紙數四六六頁
木版刷畫及寫眞版挿入
正金壹圓五拾錢
小包料金拾貳錢

長岡藩士河井蒼龍窟は近代の偉人なり、兵術に精しく理財の道に明に、兼て王學の造詣深く、識才端倪すべからざるものあり、維新の變亂一片歌々の氣已む能はず、厥氣薩長の軍に抗し、時利あらず、命を鋒鏑に委し、賊將の汚名永く泉下に受けたりと雖も、豪膽雄略兵を用ふる事神の如く、數次敵軍の肝膽を寒からしめたるもの、儒夫をして起たしむるの概あり、著者同郷の先輩蒼龍窟の爲に、本傳に従事以來十有三年を閲し稿を改むること四回、竟に此編をなす、資料正確、記述該博、偉人蒼龍窟の風貌諒略書中に躍如たり、特に傳中關係ある諸名士の寫眞筆蹟等數十を收めたるを以て、趣味津津手を措く能はざるが如き近來の好著なり。

●代現名士の演説振

島田三郎君序 小野田翠雨君著

全一冊 四六判美本 紙數三百二十二頁 正價金四拾五錢 郵税金六錢

●日本高僧の人格

文學士 嶋川龍夫君著

全一冊 菊判美本 紙數二百三十八頁 正價金四拾錢 郵税金六錢

田中涓人君著 (新版)

●發行所 博文館●

最新 倫敦繁昌記

全一冊 四六判洋裝總布上製 紙數七百三十二頁 正金壹圓 小包料金八錢

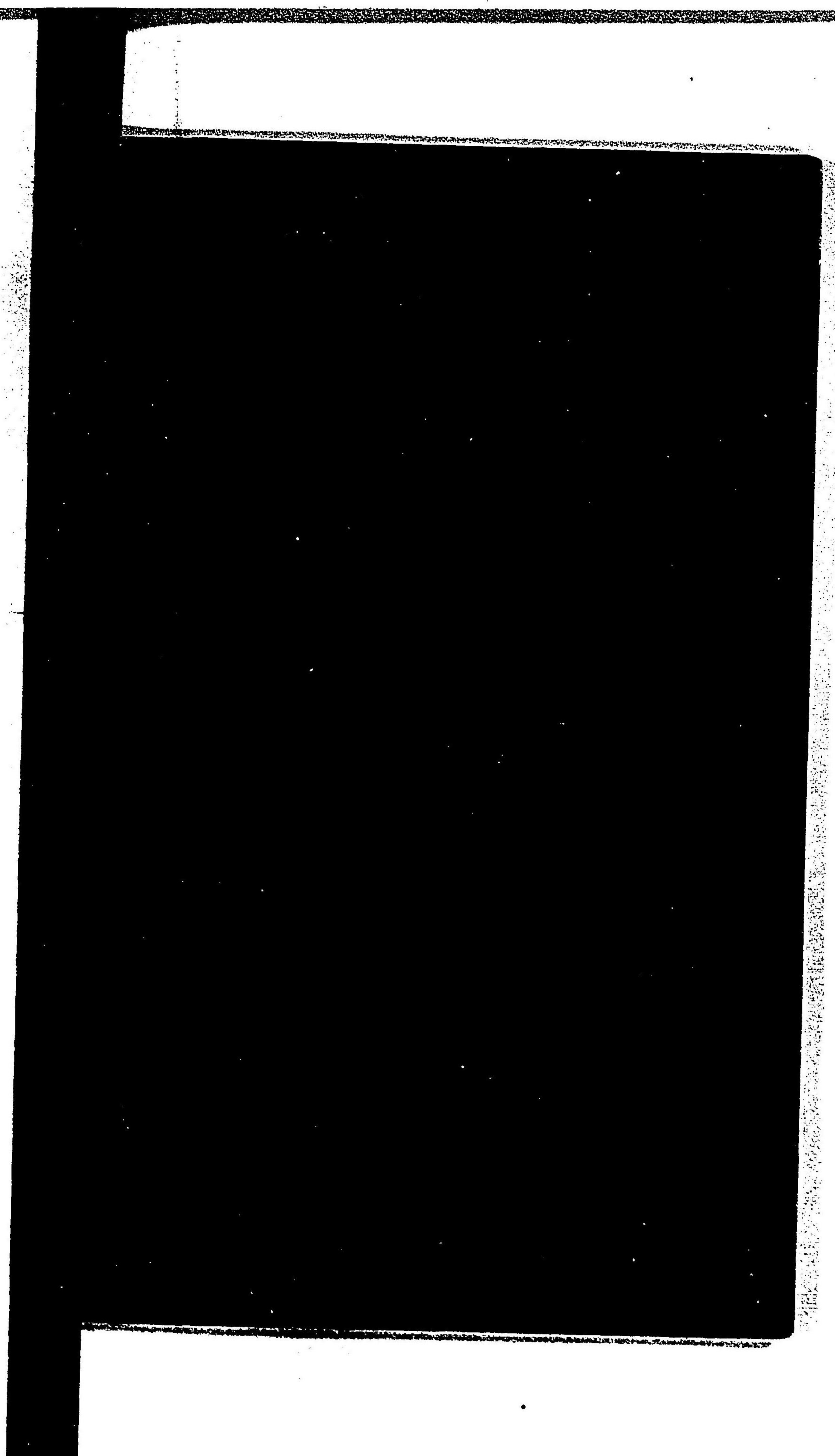
一般の讀物とし、遙かに小説以上の興味を覺え、漫遊客の顧問として、專門のガイドものは、是れ本書也。實に著綿密周到の觀察は、孰犀利痛快なる筆紙上に依りて、生ものが着倫以來年餘に亘る綿密周到の觀察は、孰犀利痛快なる筆紙上に依りて、生動し、何人と雖も、一度巻を手にし、遂に之を蔽ふの迫らざらしむるの概なくんばあらず。收動むる處、地理あり、歴史あり、人情あり、風俗あり、制度あり、文物あり、教訓あり、諷刺あり。而し附録渡邊小倫敦はがき便は、趣味の横隘、行文の流麗、眞に小品文の上乗なる。敢て江一讀を求む

卷頭 挿入 眞入 目次

- ▼田中涓人君及渡邊小城君
- ▼ロイヤル、エキストラエーゲン
- ▼ノースムブランド、アベニュー
- ▼マープルア
- ▼ハイドパーク
- ▼ピカデリー街の四ツ辻
- ▼セント、ポール寺院
- ▼アルベート記念碑
- ▼アルバ
- ▼國會議事堂
- ▼上院の内部
- ▼倫敦塔
- ▼水晶宮
- ▼ウエストミンスター寺
- ▼テームス河の
- ▼巡査
- ▼肉類の行商人
- ▼靴磨き
- ▼郵便集配人
- ▼使小僧
- ▼倫敦橋
- ▼ブラツクフチャイア
- ▼マソー橋
- ▼ラッドゲート街其他

93

334



93

334

093843-000-6

93-334

小波叢書

巖谷 小波/著

M43

DBQ-1276



